巻頭言

豊かな研究環境を作るための学会の役割

齊　藤　忠　夫†

日本の技術は欧米で発想された技術に改良を加え，効率の良い生産方式を生み出すことを特徴とすることがいわれて久しい．このこと自体大きな業績であり広く認識されているが，独自のリーダシップを発揮し難いことも確かである．

与えられた目標に向って，あらゆる犠牲を払った技術者の努力が続けられたことが，今日のわが国の成功の原因であり，高く評価される．

しかし次の目標は新しい技術的発想を日本の技術界で着想し，これを育ててゆくことである．このためには豊かで自由な発想をもたらすための研究環境の整備が重要である．これからはそこにいるだけで大きな発想が生まれるような豊かな研究と討議の環境が求められると言えよう．

研究環境の基本は研究所，大学等の整備と研究について活発な討議を行う学会とにあろう．

大学の環境ということに関して考えれば，わが国にはまだまだ戦後の貧しい時代の残渣が少なくない．たとえばアメリカの大学と比べて，多くの日本の大学においては，その研究設備はもとより，大学環境そのものの貧しさは否定し難い．現に貧しいことは問題であるが，美しい，豊かなキャンパス環境を作ることが贅沢であり，場合によっては悪いことであると考えるような風潮がなくもないことはもっと問題である．大学の施設としてゴルフ場を持っていた日本の複数の大学で，それを閉鎖せざるを得なくなったのもそう古い昔の話ではない．幸いにして大学の研究施設の劣悪さは近年広く認識され，特に国立大学でその改善の計画が進み出したことは望ましい一歩と言えよう．この計画が着実に実行され，世界的に見ても一流のレベルの優れた環境を作ることができれば，より独創的な技術の発展の基礎を作ることになろう．

学会が提供する研究発表の場にも今後改善が望まれる．近年のように国際学会が国内でも毎月のように開催され，国内の研究者も日常的に海外での学術発表をするようになると，国内の学会と国際学会がどうしてこんなにちがうのかに疑問を持たない方が不思議なほどである．

同じようなレベルの会合でも，国内学会であれば，あまり美しいとは言えないエアコンも利いていない大学の教室で討論し，学生食堂で行列をして食事をすることになる．これが国際学会ともなれば，国際会議場か，ホテルで討論し，レストランで食事ができる．バンケットも用意される．アメリカの国内でも，ヨーロッパでも普通の学会とはこんなもので，日本のようないかにも戦後の貧しさを残したような学会というのにはお目にかからない．こうした研究討論の場のちがいが学問の発想に影響を与えないとは考えられない．やせがまんをしなければならないことも時にはあるが，それを続けていると発想も貧しくなってしまう．

日本が貧しかった頃に作られた常識が変えられず，そんなものだと思ってしまう所に問題がある．これは工場一流，オフィス三流と呼ばれるような日本のオフィス環境にも共通の問題がある．オフィスの改善が一企業の問題に留まらず全企業の常識とならなければならないと同じく，学会の改善も一学会だけでの問題でなく世間の常識とならなければならない．

学会での研究討論の環境を国際的に当り前のものにするには，参加費も一桁近く高くなるだろう．国際学会なみに予稿集の代金は参加費に含まれているようにすることも当然である．

21 世紀に向けて技術者が豊かな発想を持つようにするためになすべきことの中にはあたりまえのことをあたりまえとする社会の常識の転換が必要ではないだろうか．

（平成5年9月1日）

† 本会理事　東京大学